

F. W. パーカーの美術教育論と その実践的展開に関する研究

中村和世

(2009年10月6日受理)

A Study on Art Education Theory of F. W. Parker and the Practical Development

Kazuyo Nakamura

Abstract: The aim of this paper is to examine the theory and practice of F. W. Parker's art education in consideration of the current issue of Japanese education, which aims at fostering "zest for living." First, the influence and contribution of Parker in the field of art education in both the U.S. and Japan were reviewed. Second, the main arguments of Parker on art education incorporated into the doctrine of Concentration are examined. It attempts to change the way of teaching from the quantity-based to the quality-based so that the children enhance the self-effort to gain freedom. Third, the curriculum development at the Chicago Institute that the doctrine of Concentration was applied is examined focusing on the practice of art education. In conclusion, the critical implications are made for the enhancement of art education today.

Key Words: Francis W. Parker, art education, New Education, democracy

キーワード：フランシス・W・パーカー、美術教育、新教育、民主主義

I はじめに

1 研究の目的

本研究の目的は、米国19世紀後半、民主主義の理想を実現する公立普通学校（common school）の普及と公教育における美術教育の発展に貢献したフランシス・W・パーカー（1831-1902）の美術教育論とその実践的展開について検討することにある。今日、学校教育にかかわる美術教育の研究分野では、授業時数の削減傾向の中で、美術教育の理念、内容、方法の再確認・再検討が継続した課題として挙げられている。授業時数削減の一因として、公教育としての美術教育の役割が教育に携わる管理職や教師を含め一般の人々に十分に理解されていないことが挙げられ、国内の美術教育学においてこれまで思想研究が十分になされてきていないという反省がある。パーカーは、人間形成の視点から美術教育の役割を明確化した代表的人物であ

り、その美術教育論について検討することは、現代の日本の美術教育が抱えている課題解消のために役立つのではないかと考える。さらに、パーカーが推進した新教育運動に見出される「真の教育は、自己努力（self-effort）を最高・最善に高めることによって人間の精神を自由にすること」¹⁾という理想は、新学習指導要領において継承されることになった、自己教育力や自律的判断力、心の豊かさなどの育成を目指す「生きる力」と理念の上で共通しており、美術教育において生きる力を実質化していくために、パーカーの美術教育論を現代の日本において再考することは価値があると思われる。

2 先行研究の検討

公立普通学校の普及のために尽くしたホレス・マンや新教育運動の中心人物であるジョン・デューイとともに、パーカーによる教育改革は広く認識されているものの、大浦が指摘するように、パーカーに関する

本格的な研究は、伝記が存在するのみで国内外においてあまりなされていない²⁾。美術教育に限って文献を整理するならば、以下の3つが主な先行研究として挙げられる。1つ目は、パーカーが校長を務めたクック郡師範学校 (Cook Country Normal School) の美術教師であったイダ・ヘフェロン (Ida Heferom) による1934年に出版された『フランシス・パーカー：解釈的な伝記』³⁾である。この伝記には、美術表現にかかわる実践活動が、パーカーが教師達に伝えた言葉とともに記されている。2つ目は、1984年に発表されたコゼニック (Diana Korzenik) による論文である⁴⁾。米国における1980年代の「基本に戻れ (the back-to-basics)」という運動のもと学校教育では美術教育の存在価値が揺らぐ中、コゼニックは理論的根拠をパーカーの美術教育論に求めている。3つ目は、1995年に発表されたシデルニック (Mark Sidelnick) の論文である⁵⁾。シデルニックは、他教科との相関によって美術の正当化を図る当時の教育界での動向を踏まえながら、あらゆる教科の統合を主張したパーカーの美術教育論を検討している。シデルニックは、パーカーによって明確化された以下の点にその意義を見出している。それらは、「美術は子ども達の成長と発達にとって重要な表現様式であること」、「子ども達は生まれつき芸術家であること」、「美術はあらゆる日常的な科目に統合されるべきであること」、「美術教師は、担任と協力・共同すべきであること」、「通常の教室に加えて、制作および作業のための場所を備える必要があること」である。以上の研究は、それぞれが置かれた時代背景におけるパーカーの美術教育の意義を示してはいるが、本格的な文献調査に基づくものではない。

国内においては、西村と清水が整理するところによれば、明治20年代前後からその紹介が始まり、明治30年代の活動主義を提唱する教育者によってその教育理念の拠り所とされ、公教育の主流とはなり得なかったものの、その中心的思想は大正期の新教育運動へと受け継がれていった⁶⁾。国内の先行研究の中で、パーカーの美術教育論に関するものはないが、松村將の『シカゴの新学校—デューイ・スクールとパーカー・スクール』において、パーカーの教育論、および、パーカー・スクールの実践内容が整理される中で、詳細ではないが紹介がある⁷⁾。また、1976年にパーカー著『中心統合法の理論』が翻訳出版されており、原著の約半分が訳されているが、表現指導にかかわる本質的な内容が含まれる残り半分は訳されていない⁸⁾。

3 基本研究資料について

パーカーは、教育の理論研究者というより実践研究者として活動したので、組織だったまとまった著作を

多く残していないが、パーカーの名のもと出版された著作には、『教授についての講話ノート』(1883年)、『教育学講話：中心統合法の理論の概要』(1894年)、『地理学習法』(1908年)があり、最初の2冊において描画やモデリングなどの美術に関する内容が扱われている。また、1895年の全米教育学会 (the National Educational Association) の美術教育部門でジョン・クラーク (John Clark) と交わされた公教育における美術教育の位置づけに関する討論記録が、ブラング教育出版 (the Prang Educational Company) から『教育における不可欠な原理』として1896年に出版されており⁹⁾、米国の美術教育分野では知られている。本研究では、これらの資料に加えて、シカゴ大学リゲインシュタイン図書館に保管されている『フランシス・パーカー文庫』を用いる。この文庫には、クック郡師範学校のコース・オブ・スタディや、パーカーの学校や教育に関する当時の新聞記事など多数の貴重な文献が含まれている。また、リゲインシュタイン図書館に保管されているシカゴ学院 (the Chicago Institute) の研究成果を記録しているコース・オブ・スタディを基礎研究資料として用いる。

II 美術教育史におけるパーカーの位置

国内の美術教育史の中で、パーカーの名が初めて記されるのは、東京美術学校教授であった白浜徹による講話内容を記した明治37年の『文部省講習会図画教習法』においてである¹⁰⁾。その第3章「図画の価値」において、白浜は、作業としての図画の教育的価値について説く中で、作業が備えている自らの活動を自らが楽しむという遊戯的な点は養われるべきであるというパーカーの唱道は至言であると述べている。そして、当時の学校教育に関して教師のみが働いて生徒が受動的な状態であり、これを自らの創意によって工夫し自ら楽しみ制作を行う図工科や手工科の作業によって変えることができるのではないかと論じている。

また、パーカーからの影響が指摘されている、明治30年代に活動主義を提唱した東京師範学校附属小学校の樋口勘次郎の『統合主義 新教授法』には、第1編第7章第2節「統合教授の方法」の中で、図画は、理科や歴史など他教科と相関して学ばれるべきこと、さらに、第2編第9章「画学教授法」では、画学は表現の学科であること、児童の興味・関心への考慮が必要であること、児童自身の実物観察による写生画および想像画の奨励など、パーカーの美術教育論に酷似する内容が記されている¹¹⁾。昭和57年の復刻版に解説を付した石戸谷は、大正期になって山本鼎が唱えた自由画

教育運動の中に見出せる主張の胚種が既に「画学教授法」に記されていることを指摘している¹²⁾。

米国では、パーカーは、マサチューセッツ州クインシーにおける公立学校やイリノイ州シカゴのクック郡師範学校において知識中心の旧教育から子どもの活動を中心とする新教育を推し進めた改革者として知られる。米国美術教育史の中では、ローガン (Frederick Logan) の『アメリカの学校における美術の発展』、および、ワイガント (Foster Wygant) の『アメリカ文化における学校の美術』の両書に共通して、新教育運動の旗手であるデュエイと並んで、児童理解とそれに基づいた美術指導法の開発に貢献したこと、学校の基本的役割を読み書きそろばんとする伝統的な考え方を乗り越えて、表現様式としての図画、モデリング、手工などの活動を普通教育に不可欠であることを明示したこと、人間形成の視点から美術形式を活用する考え方を広めたことがパーカーの功績として列記されている¹³⁾。また、ラッグ (Harold Rugg) は『アメリカの教育の樹立』において、1890年代においては、美術が人々の日常生活の中で果たす役割はほとんどなく、そのような中で、美術を公教育の中に位置づけることは実際には困難であり「特別な科目」としてみなされていた美術に、パーカーが新しい理論的根拠を与えその改善に努めたことを評価している¹⁴⁾。

Ⅲ パーカーの美術教育論

パーカーが教育者として活動した19世紀後半は、アメリカの教育史では近代的な公教育制度が樹立される時期であり、美術教育史についていえば、職業訓練ではなく公教育のための美術の価値が人間形成の視点から模索された時代であった。ワイガントやローガンの美術教育史研究によれば、当時は、読み書きそろばん以外は学校において不必要であり気まぐれでしかないという考え方が一般に支配的であり、その中でカリキュラムにおける美術に対する認識を得ることは困難であり、愛国心や道徳心の涵養の手段としてのピクチャー・スタディや、透視図法などを用いた描写を中心とする学習が中心であった。また、美術教師の教員養成も試行期にあり、ほとんどの教師は美術の訓練を受けていなかった。パーカー自身は、当時の状況について以下のように記している。

描画は、教育の方法としてではなく、腕の立つ職人を訓練する方法としての固有の価値の目的のために学校に導入された。目的は、手段と方法を決定した。職人の仕事へ導かれる道は、職人的な訓練を通してであるかのように思われた。この目的

は、描画をすべての他の教科から分離させた。専門学校がそのために設立された。専門教師がその仕事をするために訓練された。専門教師は、それを高尚にする試みを誤って美術を貶めた。他方、担任の教師は、描画とすべての他の教科との関係が分からずに、美術に対してほとんど共感できず、その上、美術を教える技能をほとんど持ち合わせていなかった¹⁵⁾。

パーカーが生涯をかけてアメリカに打ち立てようとした公立普通学校は、旧来の知識の量を中心とする教育を乗り越えて自律的で創造的な思考の質を基盤とすることを理想としており、この理想のもと、新しい美術教育のあり方が提唱された。

西村と清水によれば、パーカー独自の教育思想が形成されるのは、ドイツ留学以降であり、1875年から1880年までのクインシーにおける公立学校の教育改革の実践、1883年から1899年にかけてのクック郡師範学校 (1896年からシカゴ師範学校と改称) における実践を通して、パーカー独自の体系化された学理 (doctrine) としての「中心統合法 (Concentration)」が確立される。この中心統合法の理論的枠組みにおいて、パーカーの特徴ある美術教育論は形成されている。

中心統合法の学理が示される『教育学講話』の序文には、それがクック郡師範学校の同僚教師達との共同研究の成果であること、また、ヘルバルトの心理学、および、チラーやラインなどの仕事からインスピレーションを得ていることが記されている。また、人間の調和的発達や創造物と創造主との一体性 (unity) の崇高な観念をフレーベルに負っていること、表現様式の原理については、デルサルト (Francois Delsarte) の教義を活用していること、初等理科教授の研究者であったストレイト (H. H. Straight) から科学教育については学んでいることなどが記されている。さらに、『教育学講話』の最終章である「民主主義と教育」の中では、欧州におけるペスタロッチーの逸話が記され、自律的な思考の能力を開発することを理想に掲げるパーカーの教育論にペスタロッチーの影響があることが示される。

図1に示されるように、中心統合法の学理においては、子どもが中心に据えられ、そのまわりを知識の全体が円状に取り囲んでいる。パーカーは、これについて以下のように説明している。

子どもは、円の中心に立つ。彼の周りを宇宙、人間、自然の環境が取り囲んでいる。その要素におけるすべてが子どもの魂に触れる。子どもの魂は、すべてに向かっており、すべてに反応する。螺旋状にそれを拡大したいのならば、円を壊したり変

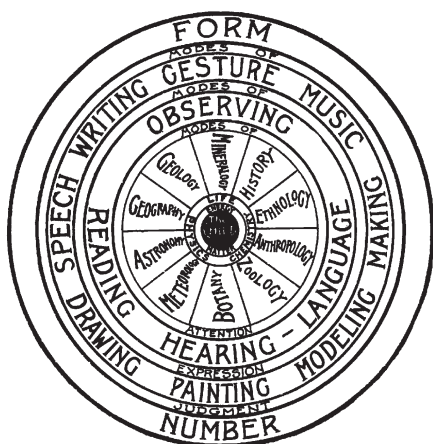


図1 中心統合法の理論図解¹⁶⁾

形したりしてはいけない。土台である円は、ずっと拡大されなければならない。それとともに、同様にしてそれぞれの螺旋は、光と真実へ向かって上昇する傾向がある¹⁷⁾。

専門知識の習得を目的とする旧来の学校では、科目は分類され個別化されるが、パーカーが理想とし実現しようとする学校では、人格 (character) を陶冶する目的のもと、図1に示されるように、科学、歴史、地理、表現などあらゆる領域が関連づけられる。パーカーは、学習の主要な対象は、人間と自然であり、さまざまな領域は実のところ創造の領域においては一つであることを論じる。さらに、知識とは子どもの精神の成長にとって栄養となるものであり、子どもが既に持っているものと、子ども自身が活用するために必要とするものとの関連づけのような知識であると述べる。つまり、教育において肝要なのは、子どもの自己努力による精神的成長力を高めることであり、量は問題とされない。パーカーは、「質を大事にしろ。量はほっておけば何とかなる。」¹⁸⁾ が中心統合法の学理のモットーであるという。

中心統合法における中心的な科目群である地理学、地質学、鉱物学、植物学、動物学、人類学などに対する興味と同様、パーカーは、子どもは美術に関しても生まれつき芸術的要素と興味を備えているという。そして、子どもに本質的に備わっている傾向を利用した学習の題材を用意する必要性について唱え、美術については空想的な創造による妖精のお話や神話などを挙げている。

中心統合法の学理において、美術は、ジェスチャー、声、音楽、スピーチ、製作、モデリング、絵画、描画、

書くことを含む表現の様式として位置づけられ、これらの表現様式は公立普通学校の8年間を通してあらゆる活動において継続的に用いられるべきことが主張されている。中心統合法が適用されたカリキュラムにおいて、表現様式が担う教育的役割は次の5つに整理される。

1. 自然のままの子ども個人のコンセプトは単純であるが、それを複雑なものへと発展させる。
2. 分析、比較、分類、推論、一般化を導く個人のコネクトを活性化させる。
3. 表現への要求によって個人のコネクトの成長が促される。
4. 個人の動機をベースにした技能・技術による表現様式を生み出す。
5. 中心的な科目群の学習において個人のコネクトを活性化するために表現様式が継続的に巧みに使われるとき、モデリング、絵画、描画の熟達が促される。

表現様式の中でも、美術にかかわる、製作、絵画、描画、モデリングは、個人のコネクトが表現的行為のベースとなっているので、「コンセプトによる表現様式 (conceptive mode of expression)」と呼ばれる。パーカーは、美術の特質は、製作者の個人的な思想と感情を表すことであると述べ、これを低減するような美術は教育的に意味をなさないと論じる。1900年の全米教育学会に発表された「すべてにおいて美術を」と題される小論の中で、パーカーは以下のように述べている。

美術は、個人にかかわる観点を除いては、価値づけることはできない。それは、全く、個人の事柄である。それは、人の自我 (selfhood) を意味する。それは他者に対する人の最善の思想と感情を表す。美術は、すべてにおいて最善を為すことである。最善を為すことは、全く動機に左右される。最善は、塗りつけ、斑点、かたちのない粘土の塊、調和しない叫びであるかもしれない。でも、もしそれが最善であるならそれは美術である。他者にその最善が感じられたなら、芸術家の自我が表れているなら、思想を表現する人の本質を観察する人に何かを伝えるのであれば、それは、ファイン・アートである¹⁹⁾。

パーカーにおいては、絵画や描画の模写や偶像や彫像の模写など単なる模倣は、その種類や性質がどんなものであっても、美術それ自体とは無関係であり、美術ではなく単なる製作でしかない。また、教育的効果もないと考えられる。パーカーは、思想の種類と性質、活動の方法、身体的作用、思想の具体化など、生命を

コントロールする動機の教化にこそ、教育は向かうべきであると考えており、個人の思想や感情にかかわる動機を欠いている美術はその教育的価値を有していないとして退けられる。そして、美術が個人的な動機によるものであるとき、教育的影響力を備え得ることを確信している。

また、パーカーは、美術は個人の思想を表すコンセプトをベースとしている表現様式であるので、近代の大建築物から最古の遺跡にいたるまで、人間の技能と知性の成長をたどることができることを論じる。すなわち、美術は、人間の生活と人間の精神から生じた創造物であり、人間の成長と発達のそれぞれの段階における人間を解釈し理解する媒介となるのである。

さらに、パーカーは、美術の表現活動において、個人のコンセプトが客観化され思想が表示されることを通して、モデリング、絵画、描画などに固有の表現形式が発展することをその教育的価値として挙げている。『教育学講話』の第12章「思想表現の諸形式の習得」では、個人の思想とは無関係に、言語、数、美術などの諸形式が訓練される旧来の指導法と対置させながら、個人の内的思想の直接的な衝動もしくは学習によって導き出された思想の表現の必要性に応じて技能を習得させる新しい指導法の特徴を示している。パーカーにおいては、技能とは、単なる技術の巧みさではなく、「物質的作用による思想の具体化」²⁰⁾である。このような捉えのもと、技能の教育的価値について、以下の5つを挙げている。

1. 動機、すなわち、魂の本質を教化する。
2. ある明確な知的な (mental) 作用を必要とする。表現のための準備としての知的作用を強化する。精神に対する物質的行使による反応を通して意識的な活動を強化する。また、表現の過程における、継続的な、意識的および無意識的な形式に関する批評によって、形式を再度、形作ることに導く。
3. 動機を遂行することにおいて意志の作用を継続させる。意志は、基本的にその力と表現に対する行為の継続に依存する。
4. 表現の行為における物質的媒介物を行使する。この行使は、表現技能を思想に適合させたいという意志の努力によって起こされる。注意と表現の道具としての、身体、健康、成長、発達、精巧さは、主に表現の行為の多様性、種類、特性に依存している。
5. 表現は、反省か注意かどちらかを、または両方を必要とする。注意は表現の動機を基盤としている。これは、あらゆる人間の思想は表現的行為に向かう傾向があることを暗示している。また、思

想は、止んだり沈滞したり行為において終わらないことを暗示している。

さらに、個人の動機から始まり、内的思想と結びついた技能を進展させるために、パーカーは、子どもの心の働きと能力を読み取り適切な判断ができる指導のアーートの必要性について論じている。これについて、パーカーは以下のように説明している。

一般的に、子どもは、自分の作品に満足する。しかしながら、コンセプトに対する塗料の対応が不適切であると感じられるとき、またそれをよくしたいという願望が生じるなら不満足さが表れるであろう。この感じられた不適切さは、批判の方向において本当に真実のものである。表現を通して、教師は、生徒の心の働きを観察する。彼は、その表現がそのコンセプトに等しいものかどうかをみる。そうすることによって、生徒は技能もしくは思想のいずれに欠けているのか推察する。このプロセスにおいて、真性さ (genuineness)、すなわち、美術に固有の性質が発展する²¹⁾。

パーカーは、思想を表現しようとする動機や感情こそが美術の胚芽なのであり、教師は、非難であれ称賛であれ、無分別な批評によってそれをつぶさないよう、真の批評力が育つよう、十分に注意を払う必要があることを唱えている。さらに、美術の教育的作用を高めるためには、表現の動機や感情を育み働かせる機会を継続的に与える必要性について論じている。

以上のように、中心統合法の学理によって美術の役割が人間形成の視点から再定義されるとき、パーカーは、美術は孤立から脱却し公益のために機能するようになることを確信している。美術はすべての子どもにとって生息地となり、最も高貴な感情と崇高な動機を教化する役割を果たし、自然および美術に存在する美しさに対する愛情をすべての人に育むことに寄与するのである。

IV 実践的展開

パーカーの美術教育に対する考え方の基本的な方向性は、クック郡師範学校の教諭であったレリア・パトリッジ (Lelia Patridge) がまとめた『クインシーメソッド』²²⁾ に記録されているクインシーでの教育実践にも多く見出すことができ、教育改革に着手し始めた当初からパーカーは美術を教育の中で重視していたことが示される。しかしながら、クインシーでの研究と実践を反映したものとみられる『教授法講話ノート』には美術に関する内容はわずかであり、中心統合法の学理が示された『教育学講話』において初めてパーカーは

独自の美術教育論を整理しまとめている。パーカーの特徴ある美術教育論は、中心統合法の学理の中に位置づけられており、それと無関係には理解し得ない。よって、本研究では、中心統合法の学理が示されたあとの教育実践を対象とする。クック郡師範学校の記録は、現在では、断片的にしか残存していないため、本研究では、1900年に開校されたシカゴ学院での実践を分析する。

シカゴ学院は、パーカーの民主的な教育論の熱心な信望者であったシカゴの資産家であるエモンズ・ブレイン (Emmons Blain) 夫人から、財政的援助を受けて、実習校 (the Model School) を備えた私立の師範学校として創設されている。ブレイン夫人は、ニューヨークの師範学校に対応するようなアメリカ中西部の権威ある教育学の学校をイメージしていたようである。(シカゴ学院の成立過程については、キャンベル (Jack Campbell) の伝記に詳細に記されているのでここでは省略する²³⁾。

パーカーは、1898年にシカゴ師範学校を辞任し、1年間は、公的なレクチャーとともに新しい学校の創設計画を進めることに費やしている。1900年7月2日に、シカゴ学院は、パーカーを学長としてサマースクールをオープンし開校にいたっている。クック郡師範学校でのパーカーの側近の教師達は、パーカーとともに師範学校を辞任してシカゴ学院に就き、学院の職員は、旧来の教師達と新しく迎えられた教師達を合わせて27人から構成されている。

シカゴ学院の学部長のウィルバー・ジャックマン (Wilbur Jackman) の報告書によれば、1900年10月からスタートした最初の学期に関しては、教育学科 (pedagogic department) と実習校を合わせて222名の申請がありそのうち実際には218名が入学したという²⁴⁾。幼稚園と1学年から4学年までの初等科 (Primary Department) が44名、5学年から8学年までの中等科 (Grammar Department) が50名、9学年から12学年までの高等科 (High School Department) が42名、教育学科 (Pedagogic Department) が77名であり、実習校は各学年約10名から20名程度の小規模のクラス編成であったことが示される。

シカゴ学院のサマースクールのシラバスによれば、シカゴ学院には、「教育学・心理学」、「自然学習 (Nature Study)」、「歴史・文学」、「地理学」、「応用数学」、「美術」、「スピーチ・リーディング・劇芸術」、「身体訓練」、「幼稚園訓練」、「手工」、「英作文」、「図書」、「博物館」、「音楽」、実習校を備えた「実践教育学」からなる部門 (department) が設置され、それぞれの部門ではその領域に関する専門家が授業を担当していた。

シカゴ学院の研究成果を記録しているコース・オブ・スタディには、教育学科の各部門および実習校の幼稚園から高等科までの各学年担任による報告があり、美術は、歴史、自然学習、文学、地理、リーディング、作文、音楽、数、手工、劇芸術などと並んで、正課として位置づけられ、学年担任によって教えられている。また、美術専門家である教育学科のダンカン (John Duncan) と学年担任が相互協力して授業を行っていた事実が記録されている。

実習校および教育学科の美術に関する報告内容からは、次のような題材を選択していたことが示される。自然の季節による変化、実物の植物、動物、人物、歴史や文学のストーリーからのイラストレーション、野外観察や小遠足での風景の写生、美術館や博物館を活用して歴史的な美術作品を鑑賞することなどである。いずれも、子ども自身の感覚を通して直接に実物と触れ合うことから学習が進められている。例えば、子ども達は、シカゴの移民に関する歴史学習の中で、シカゴにあるチャイナタウンに行き、実際に自分の目で中国人を観察して描画活動を行っており、博物館にある中国の美術作品を直接にみながら鑑賞活動を行っている。また、自然学習との相関における自然物に関する描画活動では、高学年になると種の構造や植物の構造へと着眼点が分析的な方向へ進んでいる。さらに、高学年になるにつれて、歴史との相関関係がより強められている。

美術指導では、パーカーの教育論に従って、子ども自身が本来持っているイメージから始めそれを生かし教化することが目指されている。これについて、例えば、ダンカンとホリスター (Antoinette Hollister) は以下のように述べている。

子どもは、粗野な (crude) 慣習から始めます。…… (中略) ……よい慣習と悪い慣習があり、一つは、生命があり、成長しているものです。もう一つは、既に生命が亡くなってしまった使い古した殻です。悪い慣習は、拘束されたイメージの表現です。相違は、生徒の魂にあります²⁵⁾。

また、指導では、題材および材料ともに、教師が決定するのではなく、子どもが学習過程において選択する機会を可能な限り与えている。例えば、同じストーリーからのイラストレーションを描くことにおいて、多様な場面から子ども自身の心が動いた場面を選んで描くことや、子ども自身が自由に材料を選ぶことで、オリジナルな作品を創ることが勧められている。

さらに、直接の観察を通して描くことに加えて、それを自分のイメージと融合させることからオリジナルを創り出すことの大切さが説かれている。ダンカンと

ホルスターは、自然から観察することは不可欠だが、そのみでは美術の領域に到達することは不可能であり、(1) 事実の観察、(2) 観察から得られた事実を精神と魂に融合させること、(3) オリジナルの表現というプロセスを完全に経ることを通して、魂の深みから生成される美術が可能になることを記している。

中心統合法の学理が適用されたカリキュラムでは、美術は表現としての役割を担い、他領域との相関において展開されている。以下では、そのようなカリキュラムに特徴的な美術の指導法を端的に表している事例を取り上げている。

1つ目は、第1学年担当のハリエット・アットウッド (Harriet Atwood) による実践である²⁶⁾。授業では、工作的な遊びを通して、子ども一人ひとりの「家」に対するイメージを総合的に教化することが目指されており、美術は歴史・地理との相関で学ばれている。子ども達は、自分たちが住んでみたい家の小模型としてプレイハウスの工作を行っている。プレイハウスの部屋、装飾、家具を考える中で、自分の好みや判断を大切にしながら、美しいデザインや見本からも学び、観察や話し合いを継続して行うことによって、子ども達は、もとの粗野 (crude) な家のイメージを生き生きと成長させたことが報告されている。歴史・地理に関しては、熱や寒さ、敵から守るなど家の機能について学び、原始的な人々の家を学習することを通して、環境がどのように人々の生活に影響するのか、変化する条件のもとで環境をどのように克服してきたかを理解することが目指されている。

2つ目は、第8学年を担当したノット・フリント (Nott Flint) による実践である²⁷⁾。第8学年では、アメリカ合衆国の歴史が年間の学習テーマとなっており、シカゴの社会的な歴史が10月に学習されている。この中で、シカゴの都市計画、交通機関、経済とともに、「都市生活における美的・教育的側面」の内容が取り上げられ、シカゴの建築に関して美的側面からの学習がなされている。授業では、「美しい建築とは何か」、「シカゴの建築的な理想とは何だろう」などについて話し合いが行われ、話し合いの中からシカゴの美的生活の刺激となった万国博覧会について学習を進めることになり、子ども達は自分自身の記憶と絵を通してそれについての学習を深めている。また、歴史と地理に関しては、シカゴの建築の素材とシカゴのテリトリーと人口について学ばれている。

3つ目は、教育学科と初等科との共同によるダンカン、ホルスター、ミッチェル (Clara Mitchell) による実践である²⁸⁾。この授業においては、季節によって自然が変化することを通して生命の不思議さと素晴ら

しさを感得することが目指されている。ダンカン、ホルスター、ミッチェルは、科学では、植物の変化の方法と手段に対する理解が求められるのに対して、美術ではその生命に対する賛美が結果として生まれることを述べている。授業では、春になって芽を吹き出した植物を描く活動において、単に、葉や枝の形や色を模写するのではなく、植物の中に何か大切なものを発見し、自分達とのつながりにおいて生命あるが故の運命のようなものを感じ取ることが期待されている。そのような授業を通して完成された春の芽や花に関する描画は、初等科において「眠り姫」の劇を行うときに使用される衣装の装飾デザインに活用されている。

V まとめと考察

新学習指導要領においても継承される「生きる力」を実質化し、公的な性質を備えた美術教育を考えていくために、パーカーの美術教育論の以下の点が再考されるべき内容として挙げられる。

第1は、美術に固有の特質として、「真性さ (genuineness)」というパーカーの言葉で表される、子どもの表現しようとする動機や感情に焦点化し、子ども自身の感情と思想を育む美術教育を行っていくことである。第2は、教育においては、美術は「美術のための美術」というフレーズに表されるように技巧それ自体の追求ではなく、人間と自然を解釈し理解する媒介として位置づけられることである。第3は、子どもの自律的な批評力を育むことによって、感情と思想の具体化のために必要な技能を伸ばすことである。第4は、物質的作用による思想の具体化としての技能の訓練は、動機の教化、知的作用の強化、意志の作用の継続、材料を使う力、反省力や注意力を伸ばすことに効果があることである。第5は、人間と自然にかかわる諸科目や自然からの学習を通して、子どもは自己努力によって本来のイメージを洗練することである。第6は、美術は、自然学習、地理、歴史などと並んで、必修の正課であり、日常のあらゆる学習活動に取り入れられることである。第7は、クラス担任が、他教科と共通する題材のもと、他教科と相関させながら美術を指導するほか、美術専門教員との共同による指導も行うことである。

【註】

- 1) Parker, Francis. *Talks on Pedagogics*. New York: E. L. Kellogg & CO., 2003, 281.
- 2) 大浦猛, 『実験主義教育思想の成立過程—デュー

- イにおける初期教育思想の形成一], 刀江書院, 昭和40年, pp.541-600
- 3) Heferom, Ida. *Francis Wayland Parker: An Interpretive Biography*. Los Angeles: Ivan Deach, JR., 1934.
- 4) Korzenik, Diana. "Francis Wayland Parker's Vision of the Arts in Education." *Teaching the Arts* 23.4 (1984): 288-292.
- 5) Sidelnick, Mark. "Colonel Francis Wayland Parker: Legacy of an Artist-Teacher." *Art Education* 48.6 (1995): 18-22.
- 6) 西村誠, 清水貞夫, 「訳者解説」『中心統合法の理論』, 明治図書出版, 1976年, pp.221-260
- 7) 松浦将, 『シカゴの新学校—デューイ・スクールとパーカー・スクール—』, 法律文化社, 1994年
- 8) フランシス・パーカー (西村誠, 清水貞夫訳), 『中心統合法の理論』, 明治図書出版, 1976年
- 9) *Some Vital Principles in Education: A Discussion on the Place of Art in Education, between John S. Clark and Francis W. Parker, at the Meeting of the National Educational Association, Denver, July 1895*. Boston: the Prang Educational Company, 1896.
- 10) 白浜徴, 『文部省講習会 図画教授法』, 大日本図書, 明治37年, pp.12-13
- 11) 樋口勘次郎, 『統合主義新教授法』, 日本図書センター, 昭和57年複製発行, 明治32年初版発行
- 12) 同上書, 石戸谷哲夫, 「解説」, pp.1-9
- 13) Logan, Frederick M. *Growth of Art in American Schools*. New York: Harper & Brothers, 1955. Wygant, Foster. *School Art: in American Culture 1820-1970*. Cincinnati, OH: Interwood Press, 1993.
- 14) Rugg, Harold. *Foundations for American Education*. New York: World Book Company, 1947, 526-539.
- 15) Parker, 306.
- 16) Ibid, ii.
- 17) Ibid, 387.
- 18) Ibid, 390.
- 19) Parker, Francis. "Art in Everything." *National Educational Association Journal of Proceedings and Addresses of the Thirty-Ninth Annual Meeting* (1900): 509-514.
- 20) Parker, 228.
- 21) Ibid, 300.
- 22) Patridge, Lelia E. *The Quincy Methods*. New York: E. L. Kellong and Co., 1885.
- 23) Campbell, Jack. *Colonel Francis W. Parker: the Children's Crusader*. New York: Teachers College Press, 1967.
- 24) *Francis Wayland Parker Papers*, Special Collections Research Center, the University of Chicago Library.
- 25) Duncan, John and Hollister, Antoinette. "Art." *The Elementary School Teacher and Course of Study* 2.2 (1901): 129-131.
- 26) Atwood, Harriet. "First Grade." *The Course of Study* 1.2 (1900): 157-158.
- 27) Flint, Nott. "Eighth Grade." *The Course of Study* 1.2 (1900): 175-177.
- 28) Duncan, John, Hollister, Antoinette and Mitchell, Clara. "Art." *The Course of Study* 1.8 (1901): 693-698.